

編集室

* 本学会誌のような紙媒体の書物と、Web上などで公開する電子的な書物の関係については、いろいろところで議論がなされている。本学会の論文誌も3年前に完全に電子化（オンライン化）された。これも時代のすう勢に従った対応ともいえるかもしれない。

* さて先日、電車の車内で小学生向け某予備校の広告を眺めていて、「映像情報を見ることに比べ、本を読む魅力とは何か？」という中学入試の問題を見かけた。その模範回答は、映像情報はビジュアルであるので、確定した情報を明確に伝えるのには効果的であるが、本に書かれている文章ではすべてのことを記述し切れていないがため、読む人によってだけでなく、時、状況、場所などによっていろいろな解釈が生まれ、結果として得られる情報の幅が広く、楽しむことができる、というものであるようだ。

* 映像情報と電子媒体は異なったものであるが、今のインターネット上での電子ブック的な読み方を想定すれば、いろいろな状況下で読むことはまだ難しく、その状況等に従って多様に解釈可能という幅を期待することは難しい。ただし論文誌においては、多様な解釈は期待されるべきことではないので、この点は考慮する必要はないであろう。

* 紙媒体の書物の良い点としては、他に何があるであろう。電子媒体には柔軟な検索の利便性はあるものの、一覧性は欠如している。それ以外にも、紙媒体は物質的に存在していることから、それを所有することの意味もあるのではないかと思う。

* 古典的なシャノンの情報理論では、ある事象の情報量はその事象の発生する確率のみに依存する。しかし情報を受ける側が、その情報の“有り難さ”などを勘案した体感的な情報量を測るとすると、情報源そのものにアクセスすることの難しさも情報量を定める要素になるような気がする。すなわち、街角で大多数の人に無料で手渡されるミニコミ誌に書かれている情報よりも、高価でしかもなかなか手に入らない書物に書かれている情報の方が有り難いような気がする。私の知り合いには、ちゃんと頭にたたき込む勉強をするためには、自分でお金を払って本を買わなければならない、というポリシーを持つ人もいる。

* 現状では本学会誌も紙媒体ではあるが、電子媒体に変えていくべきという議論が論文誌のように巻き起こってくるかもしれない。上記の観点では、逆説的ではあるが、多少アクセスに手が掛かるといっても、読者がそれから得られる情報に期待して読んで頂けるのではないかということで、編集する側としては紙媒体に分があると思いたい。しかし、やはり本質的な問題はコンテンツの良し悪しであって、その期待を裏切るような学会誌を編集し続けていれば、おのずと読者、すなわち会員は離れていく。そのことを心に刻んで、期待に沿う良いコンテンツを編集していきたいと思っている。

(編集特別幹事 荒川賢一)